

# 多度津町内遺跡発掘調査報告書

平成10年度国庫補助事業報告書

## 盛土山古墳

1999.3

多度津町教育委員会





1



2



3



4



5

1. 銅鈴 2. 画文帶環状乳神獸鏡 3. 勾玉 4. トンボ玉 5. 管玉

(縮小不同)

盛土山古墳出土遺物（東京国立博物館蔵）

# はじめに

本町の歴史は、おおむね、弥生時代前期後半の遺跡である「三井遺跡」に始まり、古墳群を形成している白方地区、奈良・平安時代の埋蔵文化財を有する豊原地区、江戸時代の中心地多度津地区にわかれています。これらを調査することにより、先人の手によって築かれた文化を繙いて、後世に伝えつつ、埋蔵文化財との共存社会をつくることが、私たちの使命であると考えております。

そして、本町のこれまでの調査は、埋蔵文化財と開発の共存を視野にいれた遺跡の範囲を確認するものが主であります。本年度は県指定史跡「盛土山古墳」の保護・活用を目指して遺跡範囲を確認することとなりました。

今回の調査によって、数多くの器材・円筒埴輪片・須恵器片・鉄刀片等が出土しましたが、そのうち多くの埴輪片が出土したことにより、香川県における埴輪の編年を考察するうえで、また、本町の古墳時代の社会環境等を解明するうえでの貴重な資料として研究の一助となるものと確信しております。

本町では、今後とも、文化財保護・活用を前提とした埋蔵文化財の発掘調査を実施していくなかで、基礎資料の充実を図りながら、貴重な文化遺産を後世に伝えていきたいと考えております。

最後になりましたが、この発掘調査を実施するにあたり、ご指導いただいた香川県教育委員会文化行政課をはじめとする関係各位並びに多大なご協力いただきました発掘調査地所有者の方々に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査及び整理作業に従事くださいました関係者の皆様方に厚く感謝申し上げます。

平成11年3月

多度津町教育委員会  
教育長 藤岡利明

# 例　　言

1. 本報告書は、多度津町教育委員会が国庫補助事業（県費補助を含む）として、平成10年度に実施した「多度津町内遺跡発掘調査」の概要報告である。
2. 今回の発掘調査は、県指定史跡「盛土山古墳」を対象とし、同古墳の範囲及び形状等を確認することを目的としたものである。
3. 発掘調査は、多度津町教育委員会が事業主体となり、調査の実施にあたっては、多度津町教育委員会社会教育課主事 岡 敦憲 が担当した。
4. 本書の実測図の縮尺は、スケールで表示した。また、遺構実測図中の方位は、全て磁針方位で示した。
5. 出土遺物及び図面は、多度津町立資料館にて保管している。
6. 調査にあたっては、香川県教育委員会文化行政課の指導を得た。
7. 本事業にあたっては、  
　　土地所有者の田中 巧、米田 兼男、米田 隆雄、宮武 寿夫、山地 正夫をはじめ、発掘調査に携わった石村 守、井原 康夫、岡 佳緒里、川西 貞三、藤井 祥久、藤沢 進、山田 金太郎、整理作業にあたっては西山 佳代子の協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）
8. 本事業実施及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・ご援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）  
　　奈良県立橿原考古学研究所、堺市立埋蔵文化財センター、辻 毅、香川県埋蔵文化財調査センター

## 目 次

1 調査にいたる経緯と経過	1
2 立地と環境	2
3 調査概要	5
4 まとめ	12

## 挿 図

第1図 多度津町の位置	1
第2図 周辺遺跡図	4
第3図 地形測量及びトレンチ設定位置図	10~11

## 写 真

写真1 調査前の状況	1
写真2 調査後の状況	2
写真3 向井原古墳出土異形須恵器	3
写真4 調査風景	6
写真5 調査風景	6
写真6 トレンチ状況（1）	8
写真7 トレンチ状況（2）	9

## 図 版

図版1 盛土山古墳出土遺物（1）	13
図版2 " (2)	14
図版3 盛土山古墳出土遺物実測図	15

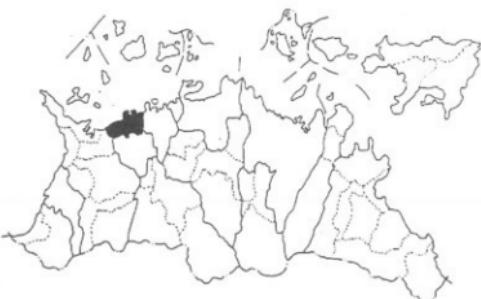
## 1 調査にいたる経緯と経過

今年度調査対象となった「盛土山古墳」は、大正4年1月、住民4名によって発掘調査が実施され、主体部であった箱式石棺から、四神四獸鏡、硬玉製勾玉、瑪瑙製勾玉、琺琅製丸玉、小玉、金環、鉄刀片等が出土したとの記録があり、現在東京国立博物館がこれらを所蔵している。出土造物については、東京国立博物館では、四神四獸鏡、硬玉製勾玉、瑪瑙製勾玉、琺琅製丸玉、小玉、金環等のほかトンボ玉も記録されている。また、多度津町誌（平成2年発行）によると、「大正4（1914）年、四神四獸鏡、硬玉製勾玉、瑪瑙勾玉、琺琅丸玉、小玉、金環など多彩な副葬品が採取され、現在東京国立博物館に収蔵されている。」と記載されている。

しかしながら、当時の出土した状況を記録した報告書等は本町では現存していない。墳丘形状についても2段であったり3段であったりと固定化していない現状であったため、同古墳の形状・墳丘の形状を確認し、正確な規模を確認することにより、同古墳の概要を解明して古墳の保存と活用を図るべく、香川県教育委員会との協議により、平成10年度国庫補助事業として調査を実施することになった。

なお、「硬玉製勾玉」が日本最大級であったことや「トンボ玉」が出土したことから、昭和51年6月29日に県指定史跡となった。

調査予定地は、たまねぎ畑・水田（周溝部）・荒蕪地（墳丘部）であり、収穫期が異なっていたため、時期をずらしながらの調査を予定していたが、県内各地で開催された全国高等学校総合体育大会の影響を受け、調査時期を大幅に変更することを余儀なくされた。このため、特にたまねぎ畑の調査（県教育委員会文化行政課が平成9年度の調査により、2重溝であることがおおむね判明していたが、古墳南側が未調査であったため、その補足調査として、2重溝であるかどうかの確認と円墳か帆立貝式古墳かの確認のための調査）においては、遺構面までを掘削し、



第1図 多度津町の位置



調査前の状況

形状のみを確認するという短期間での調査で終了せざるなくなった。

また、当初予定していなかった設定トレーニング内における主体部の確認についての指導があり、終了時期を変更しなければならなくなつた。このため調査は、平成10年9月7日から11月21日までの実働38日を第1次、11月25日から12月13日までの実働12日を第2次として実施した。

今回の調査では、墳丘直径は約42mの円墳であるが、墓域（周溝）直径を勘案すると善通寺市の青龍古墳に次いで県内では2番目である（県内における墓域直径が確認されている古墳は数少ない。）ちなみに盛土山古墳は、約75mであることを確認し、周溝についても、2重溝であることを再確認した。

出土遺物は、そのほとんどが器材埴輪片を数片含む円筒埴輪片及び須恵器片十数片であった。器材埴輪では、きぬがさ形埴輪笠部の破片及び台部破片等であった。



調査後の状況

## 2 立地と環境

当古墳の北西の黒藤山には古墳群とその山麓からは古式須恵器窯跡が確認されており、また、記録によると、付近には大小の古墳が点在しており、付近一体は本町における古墳時代の資料の宝庫となっている。しかしながら、現在ではそのほとんどが消滅、あるいは削平され痕跡を残すのみとなっている。

東には、弘田川をはさんで、「舟岡山」がある。この「舟岡山」は、弥生の壇棺が発見されたという記録はあるが、その存在は明らかではない。平成3年度に農地転用に伴う試掘調査をこの「舟岡山」で実施したが、遺構は皆無であった。記録による壇棺の出土地点は調査現場の南側となっており、今後の調査に期待したい。

そして、南西部には香川氏の居城とされる「天霧城跡」（善通寺市・三野町・多度津町にまたがる中世山城。平成2年5月、国指定史跡）がそびえている。

この麓には「向井原古墳」が存在する。同古墳は、1墳丘2石室（現在は1石室を残すのみ）という県内において極めて稀な形態の円墳であり、また、異形須恵器（東京国立博物館の記録では「偏平な球体柄付須恵器」、町誌では「有柄須恵器」と名付けている。また、「有柄遍壺」と名付けている著書もある。東京国立博物館蔵）が出土している。そして、昭和51年の県教委による調査では、残存する羨道部から須恵器壺等数点が出土して

いる。

なお、同古墳は、昭和 61 年に町指定文化財となっている。



向井原古墳出土異形須恵器



- ① 三井遺跡      ② 舟岡山遺跡      ③ 盛土山古墳      ④ 向井原古墳  
⑤ 天霧城跡

第2図 周辺遺跡図

### 3 調査概要

十数年前までブドウ畠、現在、荒蕪地になり笹・茅等が繁茂している調査前の墳丘形状は、2段構築（3段構築としている文献もある）が辛うじて確認できる状態であり、造構（主体部）の残存する可能性は非常に低い状態であった。

また、周溝部分は水田及びたまねぎ畠として利用しているが、平成9年度の県教委の調査の結果から、今回調査予定部分については残存状態は比較的よい状態であると期待された。

たまねぎの種付け時期が迫っている周溝部分から調査を開始する予定であったが、水田に水を入れる時期と重なったため、墳丘部の笹・茅等の除去から開始した。約2/3を除去したところで、周溝部分が調査可能となつたため10月5日までの実働15日間実施。前述のとおり期間に制限があったため、耕作土及び包含層を掘削し造構面を検出するにとどまった。トレントの設定にあたっては、平成9年度の県教委による調査での未調査部分を調査することにより、墳丘形状を確定できる箇所を優先とした。その結果、前年度確認された2重溝が巡る延長上に予想どおり同溝を確認した。また、各トレントいずれからも数十片の埴輪片が出土した。

次に、墳丘部調査にあたってまず、残り1/3の笹・茅等を除去し、刈り取った笹・茅等を焼却することから開始、作業は1週間を要した。トレントは、樹木の関係上から磁北からやや西への設定、墳頂部（2段目）のみとした。墳丘中央部（主体部があつたであろう部分）は、大正4年の発掘及びぶどう栽培時の耕作により、特に擾乱がひどく裾ほど残存状況は良好であった。出土遺物は、土師器片が数片であった。

また、当初の調査目的は墳丘形状の確認及び設定トレント内における主体部の有無の確認であったが、県教委の指導により設定トレント内における主体部の検出を行うこととなり、調査を延長することとなった。その結果、墳丘中央部から箱式石棺の残存部分を確認した。この石棺は、大正4年発掘時のものか、それ以外のものなのかは不明である。遺物としては、石材横から鉄刀片2片が出土した。

12月13日、土地所有者の方への現地説明会を実施し、調査を終了した。

第1トレント ..... 18m×1mを設定。

内溝（幅10.8m）確認。外溝は、内側肩のみを確認。  
造構面までを掘削。

遺物：（円筒・形象か？）埴輪片・須恵器片・サヌカイト片

第2トレント ..... 27.7m×1mを設定。

内溝（幅7.2m）確認。外溝（幅5.4m）を確認。  
造構面までを掘削。

遺物：（円筒・器材か？）埴輪片・須恵器片・サヌカイト片

- 第3トレンチ ..... 4. 8m×1mを設定。  
 　(第2トレンチ調査時、外溝  
 　造構面不鮮明であり、また、  
 　トレンチ隅にて落ちを確認し  
 　たため設定。)  
 　造構面までを掘削。落ち確  
 　認できず。  
 　遺物：(円筒)埴輪片・須  
 　恵器片。
- 第4トレンチ ..... 5m×1mを設定。  
 　外溝内側肩を確認。  
 　造構面までを掘削。  
 　遺物：(円筒・きぬがさ形)  
 　埴輪片・須恵器片。
- 第5トレンチ ..... 10. 1m×1mを設定。  
 　内溝(幅6.2m)確認。  
 　外溝確認できず。  
 　遺物：(円筒・きぬがさ形)埴輪片・須恵器片。
- 第6トレンチ ..... 14. 6m×1mを設定。  
 　内溝(幅6.2m)確認。外溝は、内側落ちと思慮する肩を検出す  
 　るも、西側南北道路建設に伴う掘削部分があり不鮮明。  
 　造構面までを掘削。  
 　遺物：(円筒・きぬがさ形)  
 　埴輪片・須恵器片。
- 墳丘第1トレンチ ..... 8. 8m×1mを設定。  
 　墳丘中央部付近から箱式  
 　石棺残存部と思われる石材  
 　1枚を検出。  
 　遺物：須恵器片数片。鉄  
 　刀片2片。鉄鎌片  
 　数片。
- 墳丘第2トレンチ ..... 7. 5m×1mを設定。  
 　遺物：土師器片数片。
- 墳丘第3トレンチ ..... 10. 1m×1mを設定。  
 　墳丘中央部付近攪乱層あ  
 　り。トレンチ裾にて墳丘落  
 　ちを確認。  
 　遺物：土師器片数片。



調査風景



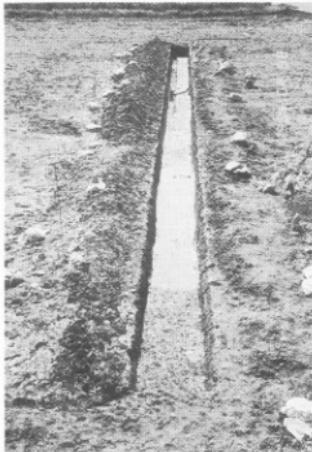
調査風景

墳丘第4トレンチ…… 10m×1mを設定。

墳丘中央部付近擾乱層あり。大正期の調査時の落ちか？  
遺物：土師器片数片。



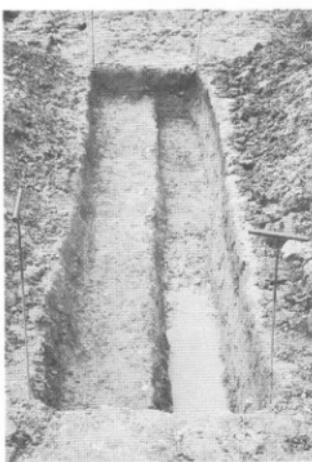
第1トレンチ



第2トレンチ

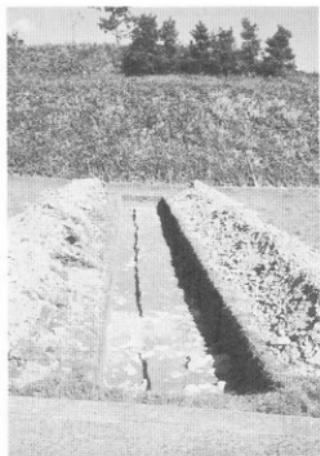


第3トレンチ

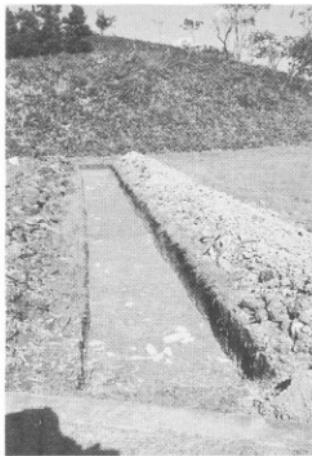


第4トレンチ

トレンチ状況（1）



第5トレンチ



第6トレンチ

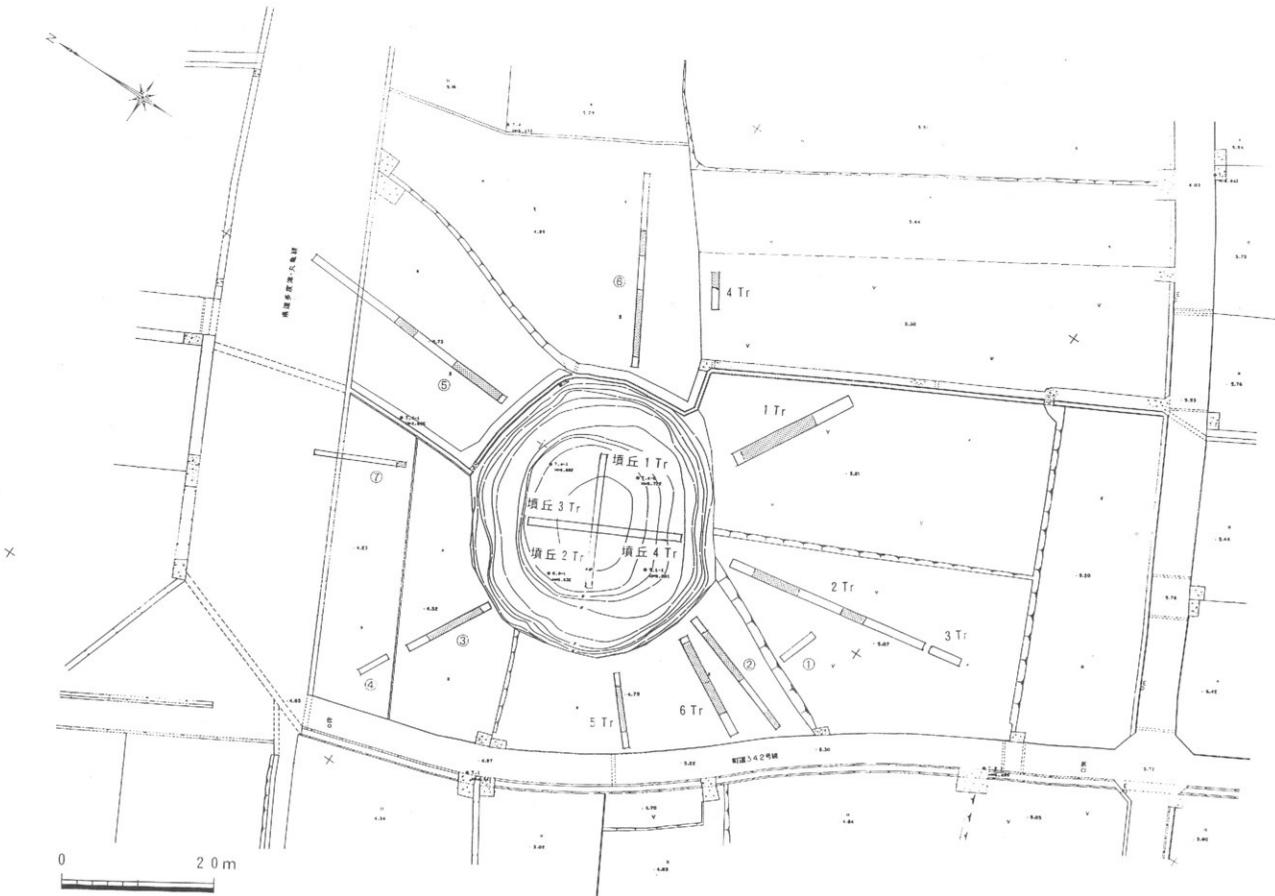


墳丘第1トレンチ石材検出状況



墳丘第1トレンチ鉄刀出土状況

## トレンチ状況（2）



第3図 地形測量及びトレンチ設定位置図

## 4まとめ

本年度調査は、諸般の事情により時間を制限された調査となり、当初目的だけを達成するにとどまった。

墳丘規模は、現墳丘直径約40m（裾周溝までは約43m）、2重周溝を含む墓域の範囲は約75mの香川県内で最大級の円墳であることが判明した。

また、主体部は、記録にある箱式石棺と思慮する石材（今回の調査では、1石のみ）を確認した。町誌等による記録では長さ2m幅0.8mの箱式石棺から考えると、大正4年時の箱式石棺の一部と断定するには、資料不足である。

出土遺物は、調査概要でも述べたように、埴輪片・須恵器片・鉄刀片・サヌカイト剝離片及び若干の土師器片であった。このうち、埴輪は、そのほとんどが円筒埴輪であった。器材埴輪では、きぬがさ形埴輪の笠部を含む数点が出土したが、器種及び部位が特定できないものがほとんどであった。推定する器種としては、きぬがさ形埴輪立飾部・靱形埴輪等があげられる。また、形象埴輪については1点が考えられるが、これもまた機種特定には至らなかった。時期については、5世紀末と考えている。

サヌカイト剝離片は周溝部分から、土師器片は墳丘部から出土したが、単独では時期決定には至らなかった。

須恵器片は、全て周溝から出土したが、時代決定には至らなかった。

鉄刀片は、前述の箱式石棺と思慮する石材横から出土したが、大正4年出土の鉄刀片と同じものかどうかは、東京国立博物館への照会が不可欠となっている。

また、今回確認した石材が当時の箱式石棺の一部かどうかは、今後行われるであろう墳丘調査に期待したい。

以上のことから、当古墳は、5世紀末の築造と考えているが、(1)周溝部分は、遺構面までの掘削にとどまったため、周溝へ埋蔵された遺物の年代決定ができなかったこと、(2)墳丘部分については、十字トレンチのみの調査であり、そのほとんどは未調査となっていることなどから、若干時期が前後する可能性がある。

そして、今回の調査によって本古墳から出土した埴輪の研究及び今後の詳細な調査によって出土する遺物の研究等により、香川県における古墳編年及び埴輪編年の一助になることを期待したい。

### (参考文献)

- 1.多度津町誌（平成2年）
- 2.トンボ玉（㈱平凡社、平凡社カラー親書138、1980）
- 3.須恵器の系譜（「歴史発掘10」講談社、菱田哲郎著、1996）
- 4.古墳時代　須恵器の生産と流通（雄山閣、中村浩著、1999）





(1)



(2)



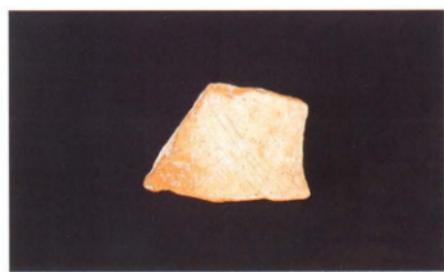
(3)



(4)



(5)



(6)

- (1) 第1トレンチ内溝
- (2) 第1トレンチ
- (3) 第2トレンチ内溝
- (4) 第2トレンチ内溝
- (5) 第5トレンチ
- (6) 第5トレンチ

盛土山古墳出土遺物（1）



(1)



(2)



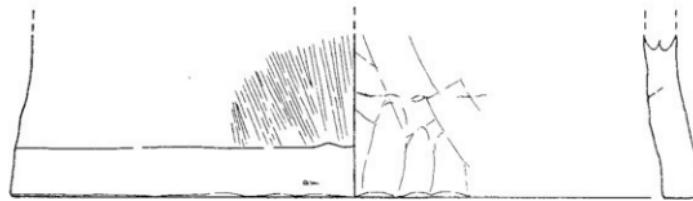
(3)



(4)

- (1) 第6トレンチ
- (2) 第6トレンチ
- (3) 墳丘第1トレンチ
- (4) 墳丘第1トレンチ

盛土山古墳出土遺物（2）



(1)

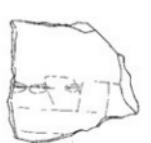


(2)

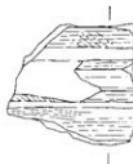
1. 増輪台部片か？
2. 円筒埴輪片
3. きぬがさ形埴輪飾部



(3)



(4)



(5)



(6)

4. 円筒埴輪片

5. きぬがさ形埴輪飾部か？

6. 器材埴輪

7. 鉄刀片

8. 円筒埴輪片



(7)



(8)

盛土山古墳出土遺物実測図

# 報告書抄録

ふりがな	たどつちょうないいせき はっくつちょうさ ほうこくしょ						
書名	多度津町内遺跡発掘調査報告書						
副書名	平成10年度国庫補助事業報告書						
巻次	1999.3						
シリーズ名	多度津町内遺跡発掘調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	多度津町教育委員会 主事 岡 敦憲						
編集機関	多度津町教育委員会						
所在地	〒764-8501 香川県仲多度郡多度津町栄町一丁目1番91号 ☎0877-33-0700						
発行機関	多度津町教育委員会						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
もりづちやまこふん 盛土山古墳	か あけんかた どぶ 香川県仲多度郡 た ど つ ち ゆう 多 度 津 町 み ど お ぐ ら か 大字奥白方 あ そ は 字片山	37404	°' "	°' "	19980907 ~ 19981213	117.5	多度津町 内遺跡調 査事業 (遺跡範 囲確認事 業)
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
盛土山古墳	古 墳	古墳時代中期 後半(5世紀 後半)	周溝(二重周 溝)	埴輪片、鉄刀片、 鉄鋌片、須恵器片	大正4年、神獸鏡・ 勾玉・トンボ玉・勾玉 等が出土。		

平成 10 年度国庫補助事業報告書

多度津町内遺跡発掘調査報告書

—盛土山古墳—

平成 11 年 3 月 31 日

編集・発行 多度津町教育委員会  
(仲多度郡多度津町栄町一丁目 1 番 91 号)

印 刷 有限公司 西山印刷所